

草津スキー行

スキーに来た。群馬県草津温泉。

草津は初めて、スキーは二十年ぶり。この連休、是が非でもスキーをやりたかったわけではない。職場の運動好きから誘われたのを断らなかつたらこうなってしまうただけのこと・・ではあるが、こういう云いかたは正確ではない。二十年も疎遠だったスキーを突然またやってみようと思いつたのには理由がある筈なのだけれど、それが自分でも判然しない。自分で思い立ったのではなく、誘われてというのがきつかけであることはよく判っているけれど、二つ返事でヨシ行こうと云ってしまった気持ちの方が自分でもよく判らない。

もともと運動は好きだ。暖かい季節には軟式野球をやる。それも投手が好きで昨年などは真夏の炎天下に二試合完投した。口にも出さないが、この歳で完投だぞと心中密かに自慢に思っている。毎日曜日ソフトボールもやっているけれど、この頃いくらバットを振り廻してもボールがちつとも飛ばなくなつてあまり興が乗らなくなつた。外野の頭を越す大飛球などとてもとても、ゴロが空しく内野手の餌食になるなんぞ毎度のことである。ソフトのチームメイトは皆若くて馬力があるので、このままポジションにしがみ付こうとすると老害のそしりは免れない。引退の潮時かなと思う。今年あたりは予備役編入を願ひ出るつもりではあるのだが。

週二回は水泳に通う。四十分、千五百米がノルマ。年中継続している運動は水泳だけで、多分これが体力維持に一番役立っている。時々思いついて縄跳びをしてみたり、駅までの2キロメートルを靴を抱えて走つてみたりするけれど長続きしない。

年に一度、夏休みを投入して山登りをする。去年の夏は北岳に登つた。七十歳までに日本百名山は到底無理としても、五十座くらいは登りたいと思つている。しかし単独行が好きなので歳を取るとちよつと出かけるというのが難しいかもしれない。独りぼつちの山登りでは、ただ転んで足を挫いただけで命取りになることもあるから、安全の為には単独行は諦めてまず仲間を探す必要があるけれど、気が置けず、体力嗜好の似た友人を高年になつて得るにはよほどの幸運がなければなるまい。

あれこれ挙げてみると長く続いている運動は子どもの頃から馴染んだものばかりで成人してから覚えたものは無い。温水プールの会費は仕方がないとして、ほかはみんな大して道具も要らず安上がりで済むものばかりである。昔誘われたゴルフも遊んでいる時間が無いと称して二年ばかりで止めてしまったが、実際時間も無かつたけれど、なによりも運動することに高い金を払うのが本当は嫌いだつたのだと思ひ当たる。太鼓腹を揺すりタバコを喫いながらプレーが出来る運動などスポーツの名に値しないよ、という気持ちは今もあ

る。運動といえば汗臭く、貧乏臭いものだという偏見は多分生涯矯正出来ないだろう。

スキーも冬山を諦めてからはちつとも行かない。仕事も忙しかったしスキー場のあの混雑がどうにも耐え難くなった。それに南国育ちで技術的な問題もある。早く言えば下手糞だ。加えて銭がかかるとなれば疎遠になって当然であろう。それなのに今年の冬は誘われてすぐにその気になったのが不可解である。

ともかく連休初日の今日、夜来の雨がからりと上がってまたとない好天、山に向かうスキーヤーの数がすごい。山麓の温泉街は静かだったが山頂近くは強風とかで朝のうち、上のほうのリフトは動いてなかったらしい。それとは知らないから八時半に旅館を出て、リフトを乗り継いでまず山頂へ行き、そこから全長八キロのコースを滑り降りて来ようという計画だったが、中途まで動いているリフトで続々運び上げられて、中継点に溜まってしまった大群衆の中で動けなくなってしまった。ここで諦めて一度滑り降りたら最後、また一時間近く並んで待たなければ上がって来れない。我慢するしかない。

結局山頂近くのスタートまで運ばれたのが午後一時。コースをあつという間に滑り降りて、また振り出しの天狗原の大雑踏に巻き込まれてオシマイ。三時には旅館に引き揚げてしまった。スキーをしたというよりはそれを履いて行列を作り、ただもうリフトに乗る順番を待っていただけである。恐れていた通り一番悪劣なスキー行になった。でもそれが大いに不満というわけでもない。連休の草津ならこれも仕方がないだろうという諦めが先立って、それに一回滑り降りて来ただけで身体の疲労はまったくないのでトシを意識しないでも済む、それが普段よりも自分を饒舌にしている様だ。

夕食まで随分時間があるのでまた何回目かの温泉に浸かりながら考えた。思いがけずスキーに来ることになった動機は、心技体ともまだまだそんなに衰えてはいないぞ、と自分で確かめたかったのではないか。

一番遅れて出発点のリフト乗り場に滑り降りて来て、雑踏の中でやっと仲間を探し出すと「どうします」という。このままもう一度行列の後尾に付いて登り直す気があるかどうかという意味である。昼飯もまだ喰ってないのにまた並べば夕方になってしまう。ともかく飯にしようやというつもりで「降りよう」といえば全員引き揚げることになってしまった。あとで聞けば一番疲労しているらしい私の意向を聞いて方針を決めようと相談していたところだったという。疲労してないつもりだけれど一番よく転んだのは事実だし、下に降りるにつれて他愛もなく転ぶ回数が増えたのが皆の心配の種だったとか。これはトシではなくて技術的な問題だと思っけれど、どちらにしても最弱者扱いにされたらいいのが判ってかなり傷つく。私見によればこの恐るべき数のスキーヤーこそが最大の問題だと思っていたのに、見当違いで自分自身が最弱者として一行の配慮の対象になっていたのかと思うとまことに嬉しくない。そういえば一行の最年長者としてのスキー行というのはこれが初めてであった。

やたらいたわられるというのはイヤな気分である。まだ壮年の心算なのに、そしてそれを確かめにやって来て、早くも老人の気分を味わってしまうことになった。

湯をやけに掻き回してみる。微かな寂しさがある。

でも体調は本当に良いのだから、まだ体力には自信を持っていいぞと自分に言い聞かすつつ、それほど参っているわけではない。

(五時通信 第一一四号 一九八五年四月十日)